F2-37

災害時における歴史観光地の防災と復興に関する研究
—(その 2)関東大震災時の避難場所に着目して—

A Study on The Disaster Prevention and Reconstruction at Historical Tour Sites when Disaster Happens
—(Part2)Evacuation site at Grate Kanto Earthquake —

○佐藤恵[1]，横内憲久[2]，岡田智秀[2]，押田佳子[2]，中原真緒[1]，安齊航也[1]
* Megumi Sato[1], Norihisa Yokouchi[2],Tomohide Okada[2],Keiko Oshida[2], Mao Nakahara[1],Koya Anzai[1]

Abstruct: We investigated the established evacuation site at the time of the Great Kanto Earthquake in Kamakura.Therefore, historical tourist destination is captured that can be widely used .

１．背景および目的

前稿(その 1)では，鎌倉の長谷地区および坂ノ下地区の観光資源である寺社に着目し，大正関東大震災時の復興プロセスの把握と今後のあり方について検討した．本稿では，その際に利用された避難場所における避難状況を把握し，今後避難場所になり得る条件を抽出することを目的とする．

２．研究方法

本稿では，1923(大正 12)年 9 月 1 日に起きた関東大震災において，避難場所となった施設を対象に文献調査を行った(Table1)．なお，避難場所の位置関係および標高を Figure1 に，調査結果を Table2 に示す．

３．結果および考察

３－１．避難場所の設置条件

(1)設置場所—避難民収容バラック[1](以下，バラック)は①鶴岡八幡宮，②師範学校校庭，⑪大仏，⑯光明寺，⑰鎌倉小学校に設置されており，臨時収容所[1]は，②附属小学校の一部と③鎌倉劇場，④妙本寺本堂に開設されていた(Table2-C，Photo1，2)．以上より，バラックは小学校や寺社等の公的な施設にのみ設置されており，臨時収容所は比較的小規模な民間施設にも設置されていたことがわかった．

(2)避難滞在期間—①②⑪⑯⑰，C より，バラックの設置がみられた避難場所については，いずれも 9 月の下旬・10 月の上旬から翌年 3 月末までの開設期間が明記されていた．一方で，②③④⑯の臨時収容所については開設期間の記載はなく，「それらの場所は余震におびえる被災者にとって，破壊された物に収容されることを希望しなかった人が多く，利用者は少なかった」とあった[1][2]．これらのことから，バラックは長期的な滞在をしており，臨時収容所は開設したものの，利用者は少なかったことがわかった．

(3)棟数および坪数—バラック数が最も多かったのは鎌倉小学校の 4 棟であり，次に鶴岡八幡宮と大仏の 2 棟，光明寺は最小の 1 棟であった(①②⑯⑰，D，Photo1，5)．また，バラック設置に要した坪数は最大が 348 坪、最小でも 32 坪であり，いずれも境内や校庭などのオープンスペースに設置されたことがわかった(E)．なお，臨時収容所について棟数等の記載はみられなかった．

Table1 Outline of the survey (調査概要)

調査方法	ヒアリング調査	文献調査
調査日	2016 年 7 月 26 日，8 月 29 日	2016 年 7 月 20 日～9 月 26 日
調査対象	長谷寺，成就院	鎌倉市中央図書館
調査内容	対象社寺における避難状況の調査	鎌倉震災史，鎌倉市史による関東大震災時の被災内容及び避難状況の整理

３－２．バラック設置の分布

(1)標高—①②④⑪⑯⑰，F より，避難場所として利用された施設※1 は，全て標高 5m以上にあった．まず，5～10m未満の標高では 7 か所の避難記録があり，内 2 か所にバラックが設置されていた．次に標高 10～20m未満では 2 か所に避難しており，どちらもバラックが設置された．一方で，20m以上の標高では 2 か所の避難があったが，バラック設置はみられなかった．以上より，バラックの設置は標高の高い場所に限らないことがわかった．

(2)地区別※2—①②⑯⑰，B より，避難民収容バラックの設置がみられたのは，雪ノ下，長谷，乱橋材木座であった．また，被害状況については死者数が最も多いのが長谷で，次いで乱橋材木座，小町，雪ノ下，大町となった(G)．以上より，被害規模によらず，地域ごとにバラックが設置されていたことがわかる．なお，小町については，避難場所として利用された段葛や若宮大路の松並木，鉄道の線路上の避難記録はあるが避難施設の設置がみられなかった．これらは観光道路として広く活用されていた事より[4]，災害時には観光客も避難場所として活用していたことが推察される(Photo3，4)．

４．小結

以上より，避難場所の設置条件ではバラックは小学校や寺社等，校庭や境内などのオープンスペースに設置され，必ずしも標高の高い場所が優先されて避難所が設置されていないことがわかった．次に避難場所の分布を見ると，被害規模によらず地域ごとにバラックが設置されており，かつ災害時には観光道路も避難場所として利用されていたことがわかった．以上から，歴史観光地である鎌倉において寺社などの観光資源及びその周辺の観光

1：日大理工・学部・まち　2：日大理工・教員・まち

道路は面・線的なオープンスペースを持つことで，市民のみならず観光客の避難場所として広く活用することができるといえよう．

5．まとめ

前稿(その 1)では，大正関東大震災時の寺社における復興プロセスと，その後の防災状況について明らかにすることにより，歴史的観光資源のサポート体制を見直す必要があることを捉えた．本稿では，長期的滞在可能な避難場所の条件より，歴史観光地では寺社も避難場所になり得ることを捉えた．以上を踏まえると，避難場所としての機能を有する歴史観光資源においては，文化財に関する法規制等を見直す必要性があるといえよう．

6．謝辞

本研究は，日本学術振興会平成 28 年度科学研究費補助金(基礎基盤(C) 16K02080)の支援により実施されました．ここに謝意を表します．

7．補注・参考文献

【補注】

※1　現存する施設のみを指す．

※2　現在利用されている大字を指す．

【参考文献】

[1]清川來吉, 鎌倉震災誌, pp126～143, 鎌倉町役場, 1930 [2]吉川圭三, 鎌倉市史, pp337～339, 嘉川弘文館, 1994 [3]鎌倉市海抜マップ, 鎌倉市HP, [4]押田佳子, 近代鎌倉における古都観光の継承状況に関する研究, ランドスケープ研究 vol. 76 no. 5, 公益社団法人日本造園学会, 2013

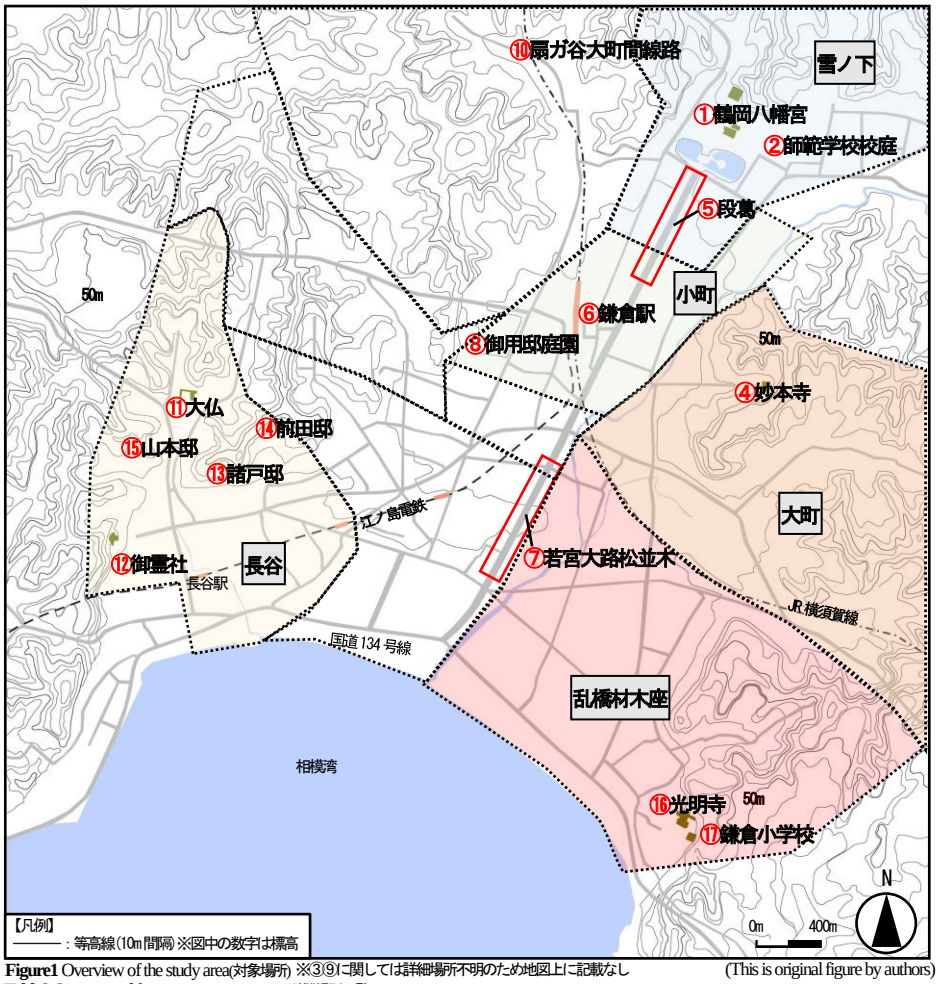

Figure1 Overview of the study area(対象場所) ※③⑨に関しては詳細場所不明のため地図上に記載なし　(This is original figure by authors)

Table2 Overview of the main evacuation site(避難場所一覧)　(This is original table by authors)

A. 名称	B. 設置施設	C. 期間	D. バラック数	E. オープンスペース	F. 標高※3	G. 被害状況	H. 地区
①鶴岡八幡宮	避難民収容バラック	9/30～翌年3月末	2棟(32坪)	境内	11m	雪ノ下 死者37人	鎌倉
②師範学校校庭 附属小学校の一部	避難民収容バラック 臨時収容所	— —	— —	校庭 —	13m		
③鎌倉劇場	臨時収容所	—	—	×	—	—	
④妙本寺本堂	臨時収容所	—	—	×	22.9m	大町　死者21人	
⑤段葛	—	—	—	道路	5m～10m	小町 死者43人	
⑥鎌倉駅	—	—	—	×	5m～10m		
⑦若宮大路両側松並木	—	—	—	道路	5m～10m		
⑧御用邸庭園	—	—	—	庭園	8.6m		
⑨木立竹藪空地鉄道線路	—	—	—	線路	—		
⑩扇ヶ谷大町間の鉄道線路上	—	—	—	線路	—		
⑪大仏	避難民収容バラック	10/2～翌年3月末	2棟(32坪)	境内	11.8m	長谷 死者92人	長谷
⑫御霊社境内	—	—	—	境内	7.7m		
⑬長谷神明前の諸戸邸	—	—	—	×	—		
⑭長楽寺谷の前田邸	—	—	—	×	25m以上		
⑮桑ヶ谷の山本邸	—	—	—	×	—		
⑯光明寺	臨時収容所 避難民収容バラック	9/21～翌年三月末	— 1棟(64坪)	境内	6.9m	乱橋材木座 死者59人	乱橋材木座
⑰鎌倉小学校	避難民収容バラック トイレ	9/20～	4棟(348坪) 16坪	校庭	7.0m		

※—は記載なし

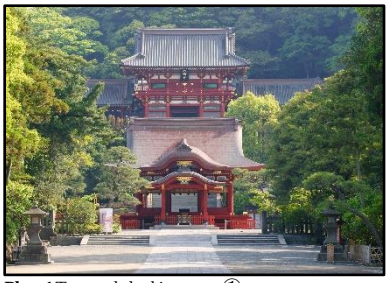

Photo1 Tsurugaokahachimangu—①

Photo2 Myohonji—④

Photo3 Dankazura—⑤

Photo4 Wakamiyaoji—⑦

Photo5 Komyoji—⑰